

「ヨハネ福音書における主の受難と復活」

2022年度聖書講座資料 (22.5.11)

I ヨハネ福音書の視点 (小林稔『ヨハネ福音書のイエス』岩波書店)

1. 復活後の視点：福音記者は、在世時のイエスを描きながら、その描写に自分たちの置かれている状況を二重写しにしていると言えよう。つまり、生前のイエスの行動とことばに合わせて、自分たちにとってそれがどういる意味を持っているのか、すなわち、復活されたイエスがまさに自分たちの只中で、今、何を行っているかを描いている。それは、生前のイエスを復活後の視点で描いていると言えよう (ヨハネ 9.22 参照)。
2. 復活者の臨在の意識：復活のイエスが、今、我々のうちに臨在している事実、また、その復活させられたイエスが自分たちの只中でどのように働きかけているかを示そうとしている (同上 12.42-43 参照)。
3. 聖霊の働き：イエスの在世時の出来事と福音記者の置かれている状況が二重写しになっている例 (同上 16.2-3; 15.26-27 参照)。自分たちの中に働く、復活のイエスの霊を体験したことを、その予告というスタイルで描いている。さらに、迫害の文脈では、ヨハネ教団が体験した聖霊の働きについて述べている。それは「真理の霊」(同上 16.12-15 参照)であり、「弁護者」(同上 16.5-7 参照)であり、裁き、世の誤りを暴くのである (同上 16.8-11 参照)。
4. 著者の意図：イエスが神の子メシアであると信じ、いのちを受けるためである (同上 20.31; ローマ 6.4 参照)。

信 (-2)
↓
神を信じて
罪と
救済に
近づくこと

II イエスの死と復活とをあたかも同じ出来事として垂直に描く 『ヨハネ 12章』

1. 「モーセが荒れ野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならぬ。それは、信じる者が皆、人の子によって永遠のいのちを得るためである。」(同上 3.14-15 参照)。
2. 「あなた方は人の子を上げたとき、はじめて『わたしはある』を悟り、

信じる → 1 (17章 2-3) 永遠の命

御父と御子の交りの中、愛の一環の中を歩く